

大詢院五十回忌追悼五十首

—— 翻字と解題 ——

日 高 愛 子

解題

数年前に佐賀県唐津市西海洞書店から一冊の写本を入手した。巻頭の三丁には算術が書かれているのだが、一紙を挟んで五丁表に、次のような記述がある（句読点を私に付した）。

来申九月、大詢院様五十回御忌被為当候処、就君様思召之旨被為在、於京都者当末九月御取越御法事御執行被仰付、和歌御勸進、御家中志有之面々ニも奉悼之歌差上候様、被仰付候歌。

但、御題者不被下、懷旧二秋之心をよせ詠候様、被仰付候。

「大詢院」は、肥後熊本藩第七代藩主細川治年（はるとし一七五八—一七八七）である。治年は宝暦八年四月に細川重賢の長男として生まれた。天明五年に藩主となり、父重賢らが推進した「宝暦の改革」を引き継ぐも、同七年九月十六日、三十歳で夭逝した。右の記述には、おおよそ次のようなことが語られる。

天保七年（一八三六）九月に京都において大詢院ごと治年の五十回忌の追善供養が行われた。これを取り仕切ったのは、「就君」すなはち治年の二女、久我通明室、美子（一七八七—一八四七）であったが、彼女の発案により、家中たちが追悼歌を献じることとなった。但し、この度は御題は出されず、懷旧に秋の心を重ねて詠じるようにとの仰せであったので、そのように詠進した。

本書には、右の記述の後、六丁表から追悼歌として献じられた五十首が記されている。熊本藩士本間素当の『本間素当歌集』雑部にも、次の歌が確認される¹⁾。

大詢院君のかくれさせ給ひて、こむとしの九月十六日
五十回にあたりたまひけるを、就君御方より、あらか
じめ秋に懷旧のこゝろをよせてうたつくれと仰ごとあ
りければ、よみてたてまつりける

五十年の秋もへにけりみめぐみのあまれる露を袖にかけ
つ、

来申九月

大詢院様至十回沛忌に為當心外

就君様思召之旨と為在於

京都者當来九月取越沛法事

沛執事は 仰付和引法勅進家中

志有之面々奉悼る引若上様

は仰付の引

但法願者不以下懷者に
秋、心をて誂様は 仰付

来申九月

元澄 岩崎平四郎

素當 本間忠助

貞弘 村井多治右

武岑 小山村喜

元朗 岩崎物部

この歌は追悼五十首の二番目に配されており、詞書の内容も右の記述と一致する。

追悼五十首の巻頭歌は、岩崎平四郎の詠である。藩士として水前寺蠟締所御用掛など務めたようだが、文化的な側面については未詳である。以下、五十首に名を連ねる主要な人物について、『肥後先哲偉蹟』²⁾などを参照しながらみていきたい。

先に触れた本間素当は、江戸で橘千蔭門のひしやうやまぢりもん一柳千古に歌道を学び、国学を熊本の長瀬真幸に学んだ³⁾。『肥後先哲偉蹟』に引かれる『千代のしるべ』跋には、

江戸の館に出て、仕の道に勤しみけるが、素より神の道を尊み、大和必雄雄しき人にて、其仕の旁、一柳千古翁の門を立ならし、其の事共論らひ、はた歌の道にさへ秀でられしも、そは知る人ぞ知る、大方の人は聞も及ばざりけんかし。

とある。歌道に明るく、自撰家集のほか、『新学考加難』⁴⁾『千代のしるべ』⁵⁾後の歌話など和歌に関する著述も少なくない。また、国立国会図書館には、素当と中島広足（春臣）の詠を真幸が判じた『二十番歌合』（宇野東風写）があるが、素当は広足と親友であった。先の『千代のしるべ』跋には次のようにある。

大人と同じ時に、中島広足翁あり。翁の歌にあやしく妙なることは、世に知らぬ人なし。されど、彼人丸は赤人が上に立んこと難く、赤人は人麿が下に立つんこと難しと云へ

る。今大人と中島翁とに、当てよき沙汰なりとこそ思ひ玉ふれ。其の委しきことは、奥に書添たる大人と中島翁との問答を見て、よく／＼さとりねかし。

素当と広足を、柿本人麻呂と山上憶良に例えるように、彼らは熊本を代表する歌人であった。ここにいう「大人と中島翁との問答」とは、次のようなものである。些か冗長になるが、引用したい。

或時大人、中島広足翁に向ひて、翁のよみ歌は、珍しく雅みやびかにして、大方の人は、かけても及ぶまじきなり、歌の様を物に譬へなば、若き男の浴衣に、縮のすごき帯をして、雪駄ふみたらんが如し。いかにも今めきたる様、めでたしともめでたし、余が歌は愚かなれど、打ふるめきたる公卿の、片山里にこもり居て、あやし／＼づをれたる軒に、やれたる簾をかけ、衣冠正しく端坐したらんやうなり。世にあはずとも、体はくだかじとこそ思ひ玉ふれとあれば、翁曰、げに宣へること、大人の歌は、調を、しくたけ高く、吾師一柳翁の歌さまを、よく会得したまへり。余も其の理を知らぬにはあらねども、大人は君に仕へて、俸禄数多給はり、顧みて何足らぬことなければ、心の俣にこそ歌もよみ出玉はめ。余は身に露程の俸禄なく、歌をもて世を渡るもの、いかでか世にあふことを勉めざるべけん。さればこそ、

あげまさか打おとしたる水の上をしばし流れて飛ぶ蜚

かな

時鳥二声三声名のらせむ夜深き夢のさめず顔して
やうの歌をもよみ出けれ。されど全の本意には非ず。

鳴かはす野辺のきゝすの声の中に今日もすみれを摘く
らしけり

山吹の花の盛に成にけり井手の玉水くまらずもあらなむ
富士の根はあけ行雲の色みえてまた月高しさよの中山
かやうの歌をこそ、本意の歌とは思ひ玉へ。されば深くな
尤め玉ひとと、わびしげに答へ玉へりと、故田代正足翁の
話なりとて、黒川稜威臣が云しなり。

「打ふるめきたる公卿」と謙遜する素当の詠みぶりを、広足が
師一柳の教えをよく会得した「調を、しくたけ高」き歌風と評
する点、興味深い。

ところで、彼らが師事した長瀬真幸は、大詢院五十回忌の一
年前、天保六年五月に没しているのであるが、五十首にはその
娘沢子の詠も収められており、真幸没後の門下たちの交遊の模
様がうかがえる。

小山武岑（門喜）は真幸門で、著述に『参考細川系図』『富
士日記』などがある。また、大石真麿（鳳兮）とともに『参考
細川系図附録』四巻を編纂した。

横田厳正は、真幸の門となり、川別と号した。『肥後先哲偉
蹟』に、

歌をよみ、最も古風を好み、世に二条家風と唱へて、歌の

体いやく、正調を乱り、古風を失ふを憂ひ、常に子弟を
誘ふには、歌をよまむと思はゞ、万葉集の歌は、皆々暗記
し居らざるべからず、といはれ居たりとぞ。

とあるように、「二条家風」を痛烈に批判し、万葉調を重んじ
た。天保九年（一八三八）五月の『月百拾番歌合』（国立国会
図書館）は広足を判者とし、横田厳正、安田貞路、木原楯臣、
岩部（岩崎）春蔭、臼杵秋房（臼杵亭助）の歌が並ぶが、彼ら
の名もまた五十首のなかに確認される。

木原楯臣（楯太）も真幸門である。天保三年に父とともに江
戸に行き、伴信友や高島千春、本居内遠らと親交を持った。
『阿蘇紀行』『国風雅』『肥後家つと』などの著述のほか、有職
故実に詳しく、殊に古代武具に関する考証を能くした。『肥後
先哲偉蹟』に小山多乎理（川景）が語ったとされる面白い逸話
が載る。

楯臣翁或年江戸に行途次、伊勢参宮せられ、本居内遠を訪
はれしに、折しも其子豊頼氏、未十四五歳ばかりなるを、
父内遠、肥後より珍しき御客見えたり、御話を承はれよと、
其座に召れしに、翁熊本への土産に、一首給へ、余は歌に
武器を詠込のが、大好である、君も其心にてよみて給へと
云れしかば、豊頼氏は少し考て、筆を執り、短冊に書て与
へらるる歌、

武士の心々に取鑑ふ春の小桜夏の卯の花取鑑ふ一に心の色
も見えたる哉に作る
とありければ、翁は閉口して、其才を感じ、自身の歌は得

見せずして、其俣返られきと、小山多乎理翁の話と。

楯臣は本居内遠とその子豊頼に自分は武具を歌のなかに詠み込むのが好きだと得意げに話したという。この逸話が物語るように、実際に彼はさまざまな武具を詠んだ歌を残している。また、五十首にみえる「信象」（狩野藤太）は楯臣の弟である。

和田巖足（震七郎）もまた真幸の門で、広足の友であった。

その歌風について『肥後先哲偉蹟』には、

翁の詠歌は、最も古調を好み、又長歌にたくみなり。思想豊富にて、筆をとらるれば、佳句妙節、口をついて出て、数百首の長歌、立ちどころに成れりと云。

とある。藩よりたびたび咎を蒙り、その身は聊か不遇であつたようだが、詩歌をよくし、

いづれも、遠く万葉以上に、さかのばれる古調を、自由によまれたる、実に達者と云べし。

と記されるように、万葉的な「古調」を宗とした⁵。歌集や和歌に関する著述として『巖足歌集』『加難陳百首擬歌合引』『二十日草』がある。

なお、『鰻玉集』に入集する肥後歌人を『鰻玉集作者姓名録』⁶によって掲げると次の通りである（追悼五十首に確認される歌人をゴシックで示した）。

真幸	肥後熊本 家士	長瀬七郎平
広足	肥後熊本 住長崎	中島太郎
素当	肥後 家士	本間忠助

武室 肥後 家士 長瀬助十郎

隆輝 肥後阿高 高瀬平

正澄 肥後益城郡 岩崎淳平

伊豆足 肥後 和田震七郎

松濤 肥後熊本 神宮寺

春栽 肥後 古山常助

追悼五十首には社人たちも詠進している。二四番歌には「藤崎社人宗尹 行藤長門守」とあり、次いで、吉永秀俊（伊予助）とその息子千秋（秀和）の名が並ぶ。「藤崎社」は藤崎八幡宮のこと。彼らは真幸・広足の門であった。また、その後には「祇園社人充詮 吉経右近」、さらに「木原村社人一雄 神田権之兵衛」の歌が続く。「祇園社」は熊本市西区にある北岡神社、「木原村社」は熊本市南区の木原山麓に建つ六殿神社で、いずれも細川歴代藩主と所縁の深い神社である。

卷末歌が広足の詠であることから、この追悼五十首をとりまとめたのは広足であつたと推される。末尾に、

吉永千秋大人にこひてうつしぬ 河島豊秋

とあり、藤崎八幡宮祠官の吉永千秋の所持本を河島豊秋が写したものであることがわかる。河島豊秋は、現在熊本市にある舒文堂河島書店の河島家第二代当主である。

いまだ詳らかでない人物も多いが、中島広足をはじめ、長瀬真幸の門を中心とする近世後期の肥後文化圏の人々が名を連ね、また細川家と彼らとの文化的な繋がりがうかがえる点で貴重で

あり、ここに翻刻紹介する。

【注】

- (1) 本文の引用は、宇野東風編『本間素当歌集』（藤井操、一九三四年）による。
- (2) 武藤巖男編『肥後先哲偉蹟』（隆文館、一九一一年）。
- (3) 長瀬真幸については、白石良夫『江戸時代学芸史論考』（三弥井書店、二〇〇一年）に詳しい。
- (4) 熊本図書館編『明治以前肥後人著述目録』（熊本図書館、一九三五年）参照。
- (5) 和田巖足については、弥富破摩雄『和田巖足と其の家集』（古今書院、一九二六年）、同『勤皇歌人和田巖足』（文松堂書店、一九四四年）に詳しい。
- (6) 中澤伸弘・宮崎和廣編『類題和歌 鯉玉・鴨川集 三』（クレス出版、二〇〇六年）。

※本稿は、科研費・基盤研究(C)18K0306による研究成果の一部である。

凡例

- (1) 漢字は通行の字体を用いた。
- (2) 序には句読点を付した。
- (3) 和歌には通し番号を付した。

翻字

来申九月、大詢院様五十回御忌被為当候処、就君様思召之旨被為在、於京都者当末九月御取越御法事御執行被仰付、和歌御勧進、御家中志有之面々ニも奉悼之歌差上候様、被仰付候歌。

但、御題者不被下、懷旧二秋之心をよせ詠候様、被仰付候。

元澄 岩崎平四郎

1 おふけなくむかしをしのお長月の袖の時雨もふりにこそふれ
素当 本間忠助

2 五十年の秋も経にける御恵のあまれる露を袖に懸つ、

貞弘 村井多治満

3 夢とのみあはれいそちの秋をへて昔なからの袖のしら露

武岑 小山門喜

4 ふりし世にかはらぬ夜半の月影とおもへはやとる袖そ露けき

元朗 岩崎物部

5 とやましたかくやましたとかしこくも昔の秋を月にとは、や

川別 横田勘左衛門

6 千五百秋てらさん月の中空に雲かへりにしにしへおもほゆ

真麿 大石十郎右衛門

7 この比とおもひしこともいつのまにいやとほさかる秋そかなしき

巖足 和田震七郎

8 むかし思ふ袖のうへに大方の秋にしも似す置露やなそ

武宝 長瀬助十郎

9 あさちふに置白露もそのかみの秋より後やしけく有らん

隆輝 高瀬文平

10 いにしへの秋をしのふる心をもそらにしもてか雁はなくらん

景五 興津栄喜

11 きへかへりむかしの秋をしのふかな露のやとりの虫の声く

貞友 永松民熊

12 露の世はあはれてふの夢とのみ聞しむかしの秋をしそおもふ

秀宗 松本尺右衛門

13 ほしあへぬしつか袂の露のまにいつか五十年の秋もへにけん

勝之 天野又左衛門

14 秋ふかきあはれはわきて虫の音も昔忍ふの草に鳴なり

董敦 谷小左衛門

15 こしかたは夢の間なれや長月の昔の秋もきのふ思ふ耳

実一 能勢喜伝次

16 過し秋の月の光も今はた、昔を忍ふつまこそなれ

直茂 城卯七郎

17 移り行世をし忍へは月見ても我身の秋はおもはさりけり

貞路 安田市助

18 おふけなくしのふ昔の秋よりやあはれそざりて月も澄らん

川景 小山市太郎

19 秋風ははらひもあへす雲霧に月のか、りし昔をそ思ふ

春岑 岩崎武一郎

20 照月の影はかはらて露しもの秋のみいと、とほさかりけり

千郷 黒川藤次郎

21 託麻野に鳴なるむしのねもころにむかしを忍ふけふにも有かも

巖子 島田四郎右衛門妻

22 秋風のさむき夜くたち空澄て昔忍へとははてるらし

故長瀬真幸娘 沢子 浦上瀬兵衛妻

23 過しよの秋をしのへは飽田野、草の袂も露そこほる、

藤崎社人 宗尹 行藤長門守

24 とほさかる昔のいと、しのはれてうらふれにけり秋の夕暮

同秀俊 吉永伊予助

25 露しくれふりにし秋を忍てや夢野の鹿の音にも鳴らん

秀俊男 秀和 吉永兵衛

26 いつしかと秋もふけ野の村時雨ふりしむかしのしのはる、かな

祇園社人 充詮 吉経石近

27 月はなほその月影の廻り来て昔の秋そしのはれにける

本原社人 一雄 神田権之兵衛

28 なかめつ、むかしをかけてしのふるも心つくしの秋の月影

克之 浦島大和

29 おふけなくむかしをしのふ袖の上に置こそそはれ秋の夕露

健貫 江上貞助

30 松高み吹秋風の音にのみ聞もかしこき昔をそおもふ

信世 武田茂熊 文平改

31 秋風に夕の空を行雲の過てかへらぬむかしをそおもふ

盾臣 木原英太 楯太

32 大方の秋の夕のかなしきにむかしをさへもかけてしのひつ

芳春 市野内蔵太

33 行めくる月の影にしならひなはしのふ其世の秋もかへらむ

信象 狩野次郎 藤太

34 むかしおもふ秋の夕の露けきにあはれをそふる初雁の声

春蔭 岩崎熊太郎 山ノ井典太

35 秋の夜のくまなき月にむかひても過しむかしのしのはる、かな

長秋 長尾喜角 松蔵

36 くまもなき月のみかけをなかむれは昔の秋をおもほゆるかも

堅磐 沼津亀之近

37 露しもの秋のあはれも打そひて昔をしのふけふにやはあらぬ

久長 平江養寿

38 いく秋もかはらぬ月の影みれはいと、むかしのしのはれそする

明道 平村俊蔵

39 とりさへも昔の秋やしのふらん鳴音かなしき天つかりかね

求巳 矢野久之允

40 雲霧に隔こし世の月影を今もしたひて雁は鳴らん

弘道 島田浪之助

41 長月のそのいにしへそしのはる、初雁金の鳴渡るとも

幸雄 佐藤喜兵衛

42 いにし秋の恵の露をおもふには今も袂そひちまさりける

清瀨 久米郡太郎

43 秋野の草ならなくに昔思ふ袖にもつゆの置そはるらん

清行 島田源次郎

44 鮑田野の草葉にあまる露なれや昔をしのふ袖重なる

清海 山田市郎右衛門 市兵衛

45 久方の雲井をわたるかりかねもむかしの秋やこひてなくらん

三崎 臼杵曾茂右衛門 亭助

46 ひさかたの空行月に問ひてまし遠きむかしの秋のあはれを

正宣 萩原喜三郎

47 草むらにすたく虫さへねにそなくむかしを忍ふ秋の夕は

正倫 真鍋治郎右衛門

48 月の中のかつらも見えず長月の時雨ふりにしむかしおもへは

英誉 伊津野普蔵

49 天津空仰もたかき月かけにむかしの秋をかけてこひつ、

追加 中島太郎広足

50 いにしへを忍ふ夕の秋の露袖にかくるもかしこかりけり

以上五十首

吉永千秋大人にこひてうつしぬ 河島豊秋

(ひだか あいこ／熊本大学大学院人文社会科学部)